

■書評

『俳句縦横無尽』考

夏石番矢・鎌倉佐弓著 『俳句』縦横無尽』沖積舎 平成
22年7月5日発行 2500円（税別）ISBN978-4-8060-
4114-6C1095

Takanori TSUJI
辻 孝憲

『俳句縦横無尽』を読了した。久しぶりに中身の濃い本に接した思いだ。時間的には神話の時代から未来まで。空間的には地球上のあらゆる地点から宇宙まで。縦横無尽というタイトル通りの内容だと思った。エッセイ集というにはもったいない内容だ。

この中で特に胸に響いて来たのは「高柳重信学校（1）―（3）」と「眼病のカタルシス」だ。夏石番矢氏は本格的に俳句の創作活動を始める頃、高柳重信氏という卓越した師との出会いがその後の氏の俳句活動の根源にある事が理解出来る。羨ましい話だ。師の存在も大きい。人は才能と環境と努力がそろった時に瞳目の成長をする。これらのエッセイには普段から私を感じ

ている事、考えている事が表現は違えてもきちんと言われている事に感動した。高柳重信氏からの返信はがきに書かれている4つの文章は芸術を志す人には的を得たアドバイスだと思う。「多角的視野」は俳句的な見方だけではなく、詩人の目から、歌人の目から、画家の目から見た視野をいうのだろう。或いは蟻の目から、鳥の目から見た世界かも知れない。「教えることも、学ぶこともできない」は俳句を詠むことは自分自身を表現すること。作者の持っている物しか出てこない。自分で自分を豊かにする意外には俳句を詠むことは出来ない。「盗む」とは勿論他の俳人をまねるのではなく詩を読んで文章を読んで感動した時、音楽を聴いて感動した時、絵画を見て感動した時、他の分野の芸術家達はどのように自分を表現し人を感動させたかを学び、盗み、それをどのように自分の俳句に取り込み、表現していくかだということだろう。そして「俳句は自分自身の『認識』を詠むものであり」のくだり、これが芸術をする意味であり、芸術の神髄を言い当てた表現だと思う。認識は芸術家が自分の表現したい事をはっきりと意識し具体化した作者の内面そのものを意味する言葉だと思う。これがなければ言葉の遊び、形の遊戯で終わってしまう。「君は俳句をやるほど不幸か」は君は俳句以外に自分を表現する方法がないのか。詩を書く、文章を書く、歌を詠む、絵を描く、歌を歌う、音楽を演奏する。俳句以外に自分を表現する方法を知らないほど不幸なら俳句に集中しろ、と言いたかったのだと思う。

「眼病のカタルシス」。人は病気を患ったり、怪我をした時、自分の内面と向かい合うようになり、そこで考えた事、感じた

事が表現できた時、芸術として昇華できるといふことだ。私の写真の師、三浦悠も過酷な暗室作業から両目に大きなダメージを受けて手術をした。一時は自殺を考えたほどだった。目が見えるようになって最初に創った作品はどこにでもある「メザシ」を投げ出して写した写真だ。目を射抜かれたメザシに共感を覚えて撮影したと聞いている。この作品にも作者の目に対する『認識』がはっきりと表現されていた。

話はそれるが、指揮者の小澤征爾氏が食道がんから快復して今年の夏から指揮活動に復帰された。嬉しい話だ。今までの氏の演奏する音楽からは何も聴きとる物はなかった。整然と整い、ただ美しく響くだけの音楽。若い頃から恵まれ過ぎた氏の音楽人生が表現する感情や哲学を未成熟なまま放置してきていたのかも知れない。あるいは余計な摩擦を避けるために他人を意識した人生だったのかも知れない。朝比奈隆氏の音楽を草書体の音楽とするなら、小澤征爾氏の音楽は楷書体の音楽。いや、ワードプロセッサで打ち出したような音楽。しかし食道がんを宣告され、自身の死を意識し、死と向かい合い、死を見つめ、死を考え、生に向かう意志の力が氏を再び指揮活動へと駆り立てているのだろう。風貌も変わった。今度は氏の指揮で是非グスタフ・マーラーの晩年の作品、リヒャルト・シュトラウスの「死と変容」(Tod und Verklärung, Death and Transfiguration)の演奏を聴いてみたい。

「十二月のパリ」は粋なタイトルだ。十二月のパリはL'Aventといってクリスマス一色。この時期、フランスに、パリに短期間でも住んだ経験がある人ならこの短いタイトルから想い出さ

れる事、想像される事も多いだろう。クリスマス前後に1週間ほどパリに滞在していた時の事が眼前に浮かんできた。朝、未だ暗いうちにうつつすらと雪に覆われた町中のマルシェに出かけ、焼きたてのフランスパンやクロワッサンを買ったり、夜はレストランの前に積まれた氷の上に並べられたカキをその場で開けてもらって食べたり、寒い日にオペラ座の傍でマロンシヨウとヴァンシヨウを買って暖まったりした事がはっきりと想い出される。これも文章が素晴らしいから自分の体験した事と文章から感じられるイメージがはっきりオーバーラップするからだろう。

そして「サイネリア」の句。二十歳の頃に還ったような気持ちになった。鎌倉佐弓氏の俳句やエッセイにはかつて自分が経験した事をふっと思い出させてくれるような不思議な魅力が感じられる。心の底にある記憶の扉をノックして大切にしまっていた想い出を呼び起こし、一緒に共有するような不思議な魅力。かつて好きだった音楽を聴いたとき、その音楽が鳴っていた当時の自分を思い起こす部分に通じる魅力。

俳句とイメージについては残念ながら夏石番矢氏の考えとは違った考えを持っている。読者からすれば俳句にイメージ画を付け足す事は貧しい想像力を補う為には歓迎されるであろう。作者からすれば表現しきれなかった内容を補足出来たと錯覚する事もあるだろう。昨今、「写俳」という写真と俳句を合わせて発表する手法がもてはやされ、作品集として出版もされている。内容的に写真と俳句の間に響き合うものが全くなかったり、俳

句、写真のそれぞれが作者の自己満足の域にとどまり作品といえる物ではない場合がほとんどである。一つの俳句の中に、一枚の絵の中に作者が表現したい事が全て表現され切った時にはタイトルでさえもしゃべりすぎる事になり不要となる場合がある。作品として発表する場合には一つの俳句として、一枚の絵として内容が熟成する事を期待する。

「世界を駆けめぐる俳句」この章には夏石番矢氏の俳句の国際化の為に世界に向かって発信していく意志の力が述べられている。氏はまだ「俳句」という定義を使用しているが、この先俳句でもなく、短詩でもなく、なにか新しい国際標準の表現方法が出てくる胎動を感じる。氏は日本語を第一とし、原語表記と英語表記を進めているようだが的確な方法だと思う。俳句は日本を母国とするが、各国の原語で詠まれた内容を理解するためには日本語表記と合わせて英語表記は不可欠だろう。言葉には響きや音楽性など人の感性に直接訴える部分もあり、言葉の貴賤もあり原語表記も不可欠のはずだ。

夏石番矢氏の代表的な句「未来より滝を吹き割る風来たる」には既にいくつもの解釈が与えられているようだが、私なりの解釈も加えてみたい。「滝」は旧態依然とした社会、組織の象徴ではないだろうか。相も変わらず毎日毎日同じ事を繰り返している。しかも常に上（権威）から下（新参者）への一方通行。落ちる水の量や重みは権威からの圧力。この句を鑑賞する人が

それぞれの置かれた環境で相当する物があるはずだ。氏の場合には俳句の世界だろう。「未来より」は未来の姿を考えている者、現状に辟易し未来を見据えて未来に向かっていている者、「吹き割る」は旧態依然とした組織に新しい考え方を吹き込み古い組織を解体する。「風」は動き、活動、行動と解釈する。この風は絶対に「青風」というようなさわやかな気持ちの良い風でない。風が吹いた後に気持ちの良さが残るかもしれないが。

そして鎌倉佐弓氏の代表句「ポストまで歩けば二分走れば春」の句。全ての読者は誰でもこの句に思い当たる事があるだろう。作者はきつと良い句が詠めて結果に期待しながら投稿しに行く時の気持ちを讀んだ句であろう。良い作品が出来て応募しに行く。恋人に手紙を書いて出しに行く。入学願書を出しに行く。クイズが解けて解答を出しに行く。映画の試写会の切符を得るためにはがきを出しに行く。少しの不安と結果に期待する気持ち胸の中にあり、スキップをしながら投函しに行く作者に代表される全ての人の姿、気持ちが目に浮かぶ句。

古来より西方の文化がシルクロード、中国、朝鮮半島を経て伝わって来たが日本の先は海で日本から伝える先がなかった。後から後から押し寄せて来た西方の文化は日本の中にどんどん堆積してその上澄みだけが残った。それが日本の洗練された文化、芸術の根源にある。長い時間をかけて洗練された文化が豊かな日本の四季と共に有機的に熟成し華道、茶道、俳句、短歌等の世界に取り込まれている。世界に俳句を普及させる際には少ない言葉数で表現するという表現形式とそれが生まれ育まれ洗練されてきた日本の芸術の本質も伝え、広めてほしいと願う。